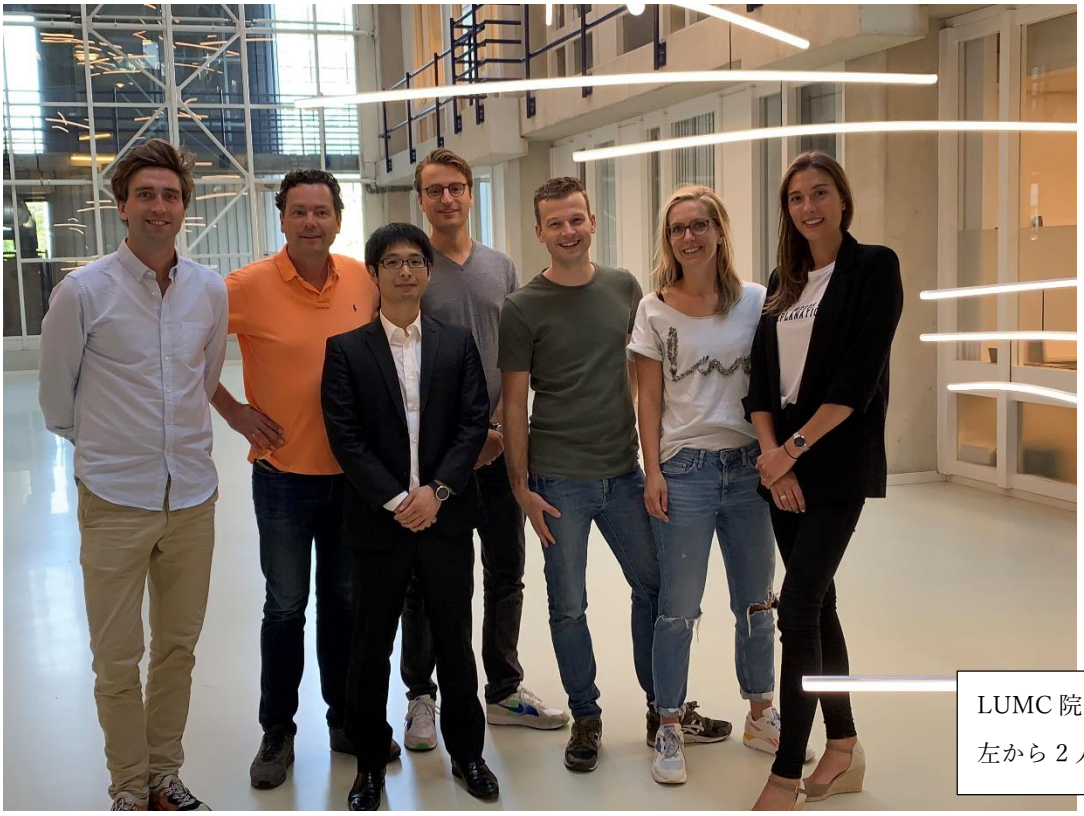
ライデン大学メディカルセンター（Leiden University Medical Center（LUMC））短期研修報告

長崎大学病院 腫瘍外科 大学院生の小山正三朗（平成 22 年卒）です。今回私は EU 加盟国内の高等教育機関と提携する EU 加盟国外の大学との間の学生の双方向の交流促進を目的とする国際交流助成制度である Erasmus+ program を通じて、2019 年 7 月 21 日～7 月 31 日まで（研修期間 7 日間））、LUMC に短期研修させていただきました。

LUMC へはこれまで当科より下山孝一郎先生や大坪竜太先生が研究留学をされ、昨年も私と同様に Erasmus+ program を通じて溝口聡先生が短期研修をされており、当科と非常に縁の深い大学であります。溝口先生は Medical student の立場で 10 週間程度の短期コースを受講されておりましたが、今回私は 10 日間の短期でもあり消化器外科医＝医師 Staff として手術見学を中心とした病院研修をさせていただきました。

この度お世話になった診療科は、以前大坪先生が研究留学されていた Dr. Vahrmeijer がグループ長をしております Image Guided Surgery group に訪れました。ここでは様々な癌腫での細胞標識傾向マーカーを用いて術中の腫瘍部の視覚化と、また遠隔転移や腹膜播種なども視覚化することでの術中評価についての臨床試験を組まれて検討をされております。今回見学では、開腹下での卵巣癌や子宮内膜症の Image Guided Surgery や腹腔鏡下での胆管細胞癌での Image Guided Surgery を見させていただきました。卵巣癌や子宮内膜症では OTL38 という Folate Receptor を蛍光標識とするもので、胆管細胞癌では ICG での Image Guided Surgery でした。日本でも ICG は腹腔鏡カメラに装備したモデルも術中の血流評価などある程度馴染みのあるものでしたが、それ以外にも蛍光標識でき、またある程度小型化したカメラの発明をされ術中に応用されていました。より分かりやすく、リアルタイムに病変部を捉えることができる技術は革新的なものであると思われ、様々な病気で応用できれば手術のクオリティーの向上に大きく貢献するものであると感じました。



LUMC 院内にて。
左から 2 人目が、Dr Vahrmeijer

また最終日には周術期管理の勉強として LUMC の ICU や新規薬剤の調剤室など訪問させていただきました。ICU では Dr Arbous, M.S の元を訪問し LUMC での ICU 体制や仕事の内容についてお話していただきました。日本の医師の仕事体制とは違い、3 交代制でのシフト制で業務を行っておりなど日本との違いをお聞きすることができました。

左画像、ICU 病棟。
右画像が、Dr Arbous, M.S

今回の研修では通して日本とオランダとの医療の相違点や先進的技術などを紹介していただき有意義な研修経験となりました。また英語力の重要性を実感することができ、様々な面において発信することの重要性を感じました。準備期間が短く、拙い英語力でありましたが訪問させていただいた Dr. Vahrmeijer をはじめ Image Guided Surgery group の皆さんには優しくしていただき大変ありがたかったです。非常に大きな収穫を得ることができ今後の医師人生において非常に有益な経験ができたと思っています。最後になりましたが、今回に際してご尽力いただきました永安武教授や松本桂太郎医局長ならびに腫瘍外科の先生方、また MEDURA の林先生、大学院生の皆様にはこの場を借りて心より感謝申し上げます。